



デジタル資本主義時代の欲望のパラドックス

NHKBS1スペシャル『欲望の資本主義』はコロナ以前から「欲望」を切り口に、レジリエンスの要請とイノベーションへの渴望に引き裂かれる現代社会を描いている。制作統括する丸山俊一氏が「デジタル資本主義」をキーワードに語った。

講師：丸山 俊一 氏

NHKエンタープライズ コンテンツ開発部 エグゼクティブ・プロデューサー
東京藝術大学 客員教授



富を生むルールの変遷 「見えざる手」は今どこにある？

『欲望の資本主義』は、経済というフレームだけでは複雑化した状況を捉えられなくなっている現代という時代に、世界経済のフロントランナー、さらに哲学者、歴史家などにまで、現状をどう見るか、混迷の原因は何なのか、問うところから始まっている。

富を生むルールは時代とともに密かに書き換えられているという見方もできる。大きく歴史をさかのぼると、14世紀にメディチ家の商人たちが活躍する時代に人々は利子という「時が富を生む魔術」に目覚めた。その後重商主義の時代、金銀財貨の獲得を富とする、空間の争奪戦が始まる。さらに産業革命で蒸気機関が変化を起こし、株式市場による資金調達が広がる時代には米国籍大衆資本主義が隆盛になる。現在は、デジタル技術による金融資本主義の時代だ。数百年スパンで変化する、いわば時代の魅せる夢イコール欲望の経済史だ。

この重商主義から産業革命への移行期にアダム・スミスは『国富論』を著し、分業の重要性と、各々が得手の仕事をすれば「見えざる手」が働き、社会全体の富が増えるとした。現在にまで語り伝えられる経済思想の原点だ。

しかし、2001年にノーベル経済学賞を受賞したジョセフ・スティグリッツは「アダム・スミスは間違っていた」と番組初回で語った。『国富論』は、デジタルテクノロジーや本格的なグローバ

ル化以前の話であり、現代の脱工業化社会にはあてはまらないと言う。

無形資産の時代 感情、欲望、想像力・創造力の商品化

現代の資本主義を特徴づける変化はグローバル化、デジタルテクノロジー化と、これらが招くソフト化・サービス化といえる。そこでは感情や精神までもが商品化される。モノからコト、トキへと消費の主軸が変わった「無形資産」の時代の到来だ。ノウハウや人材、データ、ネットワーク、ブランドなど「形の無い資本」が無形資産だ。

2021年元日に放送した回の中でジョナサン・ハスケル教授は、「資本主義は無形資産に富んだ経済に対応するため新たな形を探ることになる。格差を拡大させることも否定できない」と語っている。

デジタル資本主義は、差異で利潤を生む競争だ。デジタル化された情報が価値の源泉であり、消費者余剰も生まれる。そこで行われるのは、想像力・創造力の商品化だ。AI、ブロックチェーン、DX、メタバース*1、NFT*2などがその典型だ。

デジタル資本主義の光と影 どう均衡を生んでいくのか

ポスト産業資本主義の時代には、イノベーションによって、社会の中での

富の分配の流れも変わる。例えば自動運転のアプリの開発などが一人の天才によって成し遂げられたら、ドライバーの雇用は一気に失われ、利益の独占・寡占の強度が経済の枠組みを超え、社会問題となるだろう。工業化社会は、生産ラインが象徴するように、その工程で仕事を分かち合うことがおのずから基本となり機能しやすかったが、脱工業化した社会では、データ、アルゴリズムなどを駆使した個のアイデア勝負の側面が強まり空中戦となる。それは社会構造の不安定さにも波及していく。

人の創造力に値段が付くということの持つ逆説についても思いを巡らす必要がある。創造力の商品化はさまざまな可能性を開放する一方、人間の尊厳を失わせ、常に創造的であることが皮肉にも強迫観念となる可能性もある。

デジタル資本主義には光と影がある。両面から考えることが重要だ。生存のための欲求とは異なる欲望、無形の夢が駆動する市場で、どうバランスある均衡を生んでいくのか。さまざまな分野の知見を掛け合わせ、歴史から再発見し、番組を通して探究し続けていきたい。

*1 現実世界とは異なる3次元の仮想空間やそのサービス

*2 Non-Fungible Token (非代替性トークン)。所有証明付き・偽造不可なデジタルデータとして用いられる